

《研究ノート》

「農産平均の説」の世界

——福沢諭吉とハクストハウゼン——

樋口辰雄

『学問のすゝめ』に始まり、『文明論之概略』（緒言）から小論『民情一新』に至るキー・ワード（バツ・オスティナート）を追求めると、赤い糸の一つに、「不平」や「人心の変動」「人心騒乱」「人心騒擾」がある（山田博雄「『人心の騒乱』をめぐって」『福澤手帳』104）。福沢にとり人間のもつ「不平」・「不満」は、ネガティブな性質を指すというより、むしろ、テクノロジーの発達やそれによる社会の急激な変動に伴う、人間の情的活性状態を意味する（「細事は理に依頼して、大事は情に由て成るの風」。また、『丸山眞男回顧談（下）』2006年、188頁以下）。その点で、後に触れるエッカルト『近代ロシア』や、ウェイクフィールド『植民論』の中に、ポピュラー・ディスコンテント（人民の不平）とかポリティカル・ディスターバンス（政治的騒擾）なる文脈に出会うと、福沢とこれら2著との出会いは、『学問のすゝめ』（初編・明治5年）ないし7年辺りからか、と想像される。

ペザント・コミュニズム

福沢が、「ドイツ世襲貴族」の家系に生まれ、ジャーナリスト、そして後に宰相ビスマルクに認められて外交官となったユリウス・エッカルトの著書『近代ロシア』（ロンドン、1870年刊、英書）を入手し、『民情一新』第4章（「此利器を利用して勢力を得るの大なるものは進取の人に在り。魯国及び其他の例を見て知る可し」）

において、ナロードニキ主義の先駆者となったヘルズン（ゲルツェン）の専制政府に対する反逆を紹介していることは、周知のところである。次第に西漸するロシア帝国に対抗して、プロイセン・ドイツの政治的利害と西欧文明の優越を意識した、エッカルトの文は、決して流麗とは称し難いしろものではあるが、にも拘らず、第1部、アレクサンドル2世治下のロシア、の叙述の要旨を的確に捉え「意識」する福沢の力量には、余人を以て代えがたいものがある。ただ、福沢による訳と英文の相互を比べてみると、読者に、どれほどエッカルトの真意が伝わってくるのか、これはまた別問題である（その一例として「社会党」「自由党」がある）。「この党与〔ゲルツェンに率いられた派〕は、……心事を変じて他の自由党の中に混同し、其説に謂らく、魯国の農産平均の説を以て、先ず之をポーランドの地方に施行したらば、遂には地主廃絶の事も実際に行はるゝことあらんとて、只管この一点に論鋒を向けたれども……」。政府に対抗して、ポーランドとリトアニアにロシア固有の「農産平均の説」を導入して、西欧諸国の土地の私的所有を廃絶し、これによって社会主義的良心を満たそうとする、ゲルツェンらの社会主義・民主主義的な動向を、福沢はこう紹介しているのである。『民情一新』第4章を通読する読者は、福沢が意識している「農産平均の説」とは一体何を意味するのか、これを深く詮索せずに、又は、農業生産ないし農産物を均し

平均化する説程度にしか理解しないままに、通過してしまうのではなからうか。

既に拙論（『『民情一新』における近時文明の大騒乱』）で詳述したように、これは、エッカルトの原文にあるロシアの「ペザント・コミュニズム」（農民共産主義。『ドイツとロシア』の著者、肥前栄一氏はこれを「貧農的」共産主義と訳しておられる）に該当する語句であること、そのみでなく、ロシアの農村「共同体」に伺われるこの土地再配分の慣行が、その「発見者」であるドイツ農政学者、アウグスト・フォン・ハクストハウゼン（1792～1866）の著書（『ロシアの国内事情、国民生活、とりわけ農村生活の研究』全3巻）と密接に関連すること、そして、19世紀の「農奴解放」前におけるロシアの「共同体」（ミール、オブシチーナ）を分析したハクストハウゼンの業績に関連して、エッカルトが、福沢の依拠した『近代ロシア』第2部「ロシア的共産主義」の中で、やや詳しく触れていることである。ちなみに、こうしたロシアにおける共同体の慣行は、いわゆる「ヴェラ・ザスーリチへの手紙」（1884年）においてかならずしも明解な回答を示していないマルクスの「農村共同体」論や、第1次ロシア革命に触発されて発表されたマックス・ヴェーバーの論考「ロシアにおける市民的民主主義の状態について」（1906年）、大塚久雄『共同体の基礎理論』、鈴木健夫『帝政ロシアの共同体と農民』、中村勝已『近代市民社会論』などとオーバーラップする重要な経済史の対象と思われるが、福沢がエンゲルス（『共産党宣言』の注。1888年）より逸早く注目したこの制度を掘り下げるべく、以下、第2部「ロシア的共産主義」の内容を若干紹介することとしたい。

定期的割替（periodical re-allotments）

エッカルトによれば、これまで様々な事情か

ら、ロシアの共産主義ないしは土地に対する全農民の平等なる権利、という制度は拒否ないし無視されてきたが、この制度、システムを初めて「発見」したのは、1842年から43年にかけてロシアを旅したハクストハウゼン男爵であった。西欧文化とその自由主義に批判的であった彼は、西ヨーロッパとは違った「社会問題」の解決方法をスラヴの民族的特性、とりわけ農村社会に見い出した。そこでは、村落の住民に属する土地の全ては、耕作者の共有財産であり、その土地は各家族人数に応じて既婚者の間に、「平等」に区分・分割されていること、更には、「定期的割替」の実施という慣行が遵守されていた（鈴木氏の研究によれば、モスクワのはるか南西地域における各耕区では、土地環境、土壌以外に、屋敷からの距離などの要素を考慮して土地の均等化がなされた）。ロシアに独特な農村共同体（「均等土地利用と定期的土地割替」）を「発見」したハクストハウゼンは、その見聞をモスクワ大学に集まった若き活動家たちに伝えた。既存のロシア専制政府に幻滅していた学生らは当時、ヘーゲルやシェリングのドイツ哲学を崇拝していた。だが、ハクストハウゼンによる「発見」は、フランスの社会主義（フーリエ、サン・シモン）の研究に熱心なグループ（代表がゲルツェン）と、シェリングの自然哲学、ドイツ・ロマン主義の研究からやがてスラヴ主義を唱えるグループ（アクサーコフ兄弟、キレエフスキー兄弟、ホミャコフ、サマーリン）との対立に和解の機会を与えた。ピョートル大帝による「西欧化」政策を悪魔と見做す後者のグループは、見捨てられたスラヴ的伝統の回復、民族史の研究、ビザンチンの教会政体への復帰を強調し、前者と共にロシア共産主義というこの発見の中にこそ「社会問題」を解決する方策があると期待した。しかし、ゲルツェンらは、そこでの社会主義的性格にこだわった。

1861年2月、アレクサンドル2世による「農奴解放」が遂に実現することとなるが、ドイツ・ルッター派プロテスタントと思われるエッカルトの見方からすると、この解放は、農業の取り決め、個人と共同体との関係、定期的土地の割替（つまり解放後、領主が保有する「荘園」の内、3分の2が村落共同体に有償で分与されたが、その村有地は当該地域の家族全てに均等に——いわゆる「実質的平等」——しかも家族成員の頭数、ないし「チャグロ」に応じて定期的に割替えされる。法律では12年と規定。実際は長・短があった。——ヴェーバーは、ナロードニキの思想に従ったこうした土地配分を「需要原則」ないし「消費基準」に基づく配分方式、或は多義的な「実質合理性」を意味する、「小農民的」「自然法」に基づく土地への権利要求の一つ」と捉えている）、「徴税」の方式などの点で、何ら変化がみられないとの厳しい判断が下された。また、農村共同体という共産主義の理論に関し、解放後も、スラヴ派、ゲルツェンら民主主義者、保守的なハクストハウゼンらは、その思想的立場を修正しようとはしなかった。これら3者に特徴的なことは、土地生産性、ないし農業組織とその生産性への影響という西欧の経済学（ポリティカル・エコノミー）による「懸念」を無視し、道徳的・政治的・宗教的な議論で自己を弁護してきたことである。

プロクルステースのベッド

エッカルトによれば、共同体成員の平等な権利・完全な平等というロシアの農業組織は、様々な問題に直面せざるを得ない、という。それは、「解放」後の農民らが周囲の農民レベル以上に自己を発展向上させず、むしろ「退廃」（「居酒屋」などで浪費するなど）が見られること、土地の割替なる「プロクルステースのベッド」（捕えた旅人を自分の寝床に寝かせ、これに合

わせ切断したり引き伸ばしたりして、苦痛を与えたギリシア神話に出てくるポセイドーンの子で、山賊の首領）は、個人の創意を促進させないこと、窮乏による「破産」に対する自己責任の欠落、村落における「連帯責任」（人頭税、貢租等）がかえって怠惰な近隣者に有利に作用し、真面目に働く農民たちを共同債務者に陥れること、「土地改良」に努力した者が「籤」による定期的割替によって不利益を被る現状に置かれていること、村落内で均等に割り当てられた土地・地条が1ヶ所に集中せず、各地に分散しているがために、耕作に際して莫大な時間や労力が浪費されること、などの問題の指摘である。西欧文化は道徳的な「悪」に充ち、革命というどん底にある以上、ロシアは、リベラリズムより、むしろスラヴの民族的特質の方を堅持すべしだというハクストハウゼンの主張（没後刊行された『ロシアの農村事情』1869年）に対し、エッカルトは、ロシアこそ西ヨーロッパに比べて「集権化」が顕著である、それゆえ自立と独立は未完成である、ロシア政治の中心は「都市」にあり、都市こそ「官僚制」の温床である、ロシアのごとき低次の文明段階ではむしろこうした官僚組織を必要としている、意欲ある農民達が定期的土地の割替という「プロクルステースのベッド」に強制されている限り、貴族政に期待を寄せるハクストハウゼンの構想は実現困難である、などと批判する。

また、個人主義とエゴイズムの原理に立つ西欧の政治・社会生活は、キリスト教の根本教理を否定し、「万人に対する万人の戦い」〔ホッブズ, T.〕を招き、2つの敵対階級への分裂や窮乏化に喘いでいるが、土地の均等分割、各人に与えられたその生来の権利、共同社会の思想に立つロシアの根本原則は、「キリスト教の愛」、同胞愛にある。重要なことは東方キリスト教の徹底の実現と、異教的非ロシア的文明を擁護し

てきた貴族階級を消滅させることで、本来の民族的純粋さが回復されるというスラヴ派の主張に対し、エッカルトは、その理念の底流に潜む西方への軍事的膨脹主義を警戒する。最後に、反政治経済学を特色とする、「共和制連邦国家」にロシアの未来を見い出そうとするゲルツェンとその党派の動向を論じながら、エッカルトは、1848年以上に、近代の社会主義（西欧内部の「労働者階級」と東方から「国境」へと迫る社会主義の双方）が現実化しつつあり、その危険がドイツに迫っていることを指摘して、ロシアの外交官に与えたイタリア政治家・カヴールの言葉をもって締め括る。「諸君らが農民たちに与えている土地への平等なる権利は、われわれ西欧の者にすれば、諸君らの軍隊よりはるかに危険なのだ」と。

以上が『近代ロシア』第2部の大要である。

福沢は、エッカルトの著書（第1部・第2部）から「定期的割替」を伴う共同体的慣行を理解し、これを「農産平均の説」というユニークな表現へともたらした。この「農産平均の説」がエッカルトやハクストハウゼンは無論のこと、トクヴィル（一彼は、1853年、ハクストハウゼンの著書を部分的に要約したノートを書き残している）、マルクス、ヴェーバーらの問題系譜に連なること、更に、「ベザント・コミュニズム」という古層がスターリンによる強制的「穀物調達」を契機に「再」浮上した歴史的事実（溪内謙『上からの革命——スターリン主義の源流——』2004年第3・4章）があること。以上からして、20世紀まで持ち越されたこの問題領域は今以て複雑である。

（ひぐち たつお、本学科教授）